摂津池田稲束家の横丘山荘

小 野 佐 和 子*

The retreat of the Inatsukas at Yokooka in Settsu Ikeda

Sawako ONO

摘要：摂津池田の富裕商人稲束家の横丘山荘について、その植栽を、『稲束家日記』をもとに考察した。その結果、植栽年代、樹種、管理、利用の実態が明らかになった。さらに、山荘の植栽が風景の美しさを求めてなされ、そこに花、新緑、紅葉、寒林に対する好みが見られていること、また、山荘の植栽を含めた自然が、審美的愛玩物であると同時に、用材、燃料等の供給源であり、農業的観察の対象であることを認めた。

はじめに

近世後期、商品的農業の発展により成長した農村部の富裕層が、地方の文化社会を形成したことはよく知られている。俳諧、茶の湯、書画等、その文化活動の内容は様々であるが、そこには当然、それら活動の舞台としての庭園の存在が考えられる。事実、江戸近郊の豪農あるいは在郷町の富裕な商人が広大な邸宅を構え、江戸の文人と交流する様を『遊暦雑記』はたびたび記しているし、『尾張名所図会』によると、海西郡森津新田村庄屋宅の藤は四日市や津からも多くの人を集めたという。しかし、それら庭の実態は、資料上の制約もあり、あまり知られていない。

摂津池田の稲束家は、地主経営と並行して酒造業・金融業を営む有力商人で、商品経済発展の過程で成長した富有層の一人である。同家は町近郊の横丘に山荘を有しており、山荘での生活が大部の日記に記されている¹⁾。今回は、日記中の記事により横丘山荘の植栽の様態を明らかにしたい。

1. 池田と稲束家

大阪周辺に郷町の一つ池田は、猪名川流域の物資の集散地として、近世初頭より市場特権を保証された町場である。明暦期には酒造株組織が構成され、元禄期には、六三株、酒造戸数三八、米石高一万石をこえる酒造業の全盛期をむかえる²⁾。本稿の対象となる近世後期、池田の酒造業は灘、西宮の酒造業におされて衰勢にあったが、町の主導的勢力はなお酒造家にあった³⁾。池田村の戸数は、安永九年（1780）に、商人三五九、職人一三〇、百姓一一七、雑業一二一九、その他三四六、合計二一七戸とされている⁴⁾。

町の中心部は、能勢街道に沿った、東・西本町と米屋町・中之町であり、酒造・青物・魚など特権によって保

護された商人はほとんどこの中心部に居住していた⁵⁾。

代々小兵衛を名のり、屋号を麴屋（甲字屋）と称す稲束家は中之町に居を構え、元禄十年（1697）の『池田村絵図』には「問屋小兵衛」と記されている⁶⁾。米屋町・中之町に二十四軒ある問屋の一つである⁷⁾。そのうち稲束家は、酒造業・金融業・貸家業を営む一方で、土地集積を行って商品的農業生産に従事し、近世中期以降、門閥商人にかわる新興商人の代表となる⁸⁾。

ところで、都市と農村を結ぶ商品ルートの中間的拠点である在郷町は、都市と農村の中間的な性格を有しており⁹⁾、池田もその例にもれない。池田は行政上は村であり、稲束家を含め池田の商人は身分的には百姓である。景観的にも、表通りには軒を接して商店が並ぶが裏側には田畑が広がる。既述の職業構成をみても、商人・職人とともに百姓がみられる。さらに、とりあつかわれる商品の多くは、炭・材木・木綿・果実・穀物といった近郊農村の産物である¹⁰⁾。

都市と農村の中間的性格は稲束家の生活形態にも現われている。つまり酒造業・金融業を営む一方で農業生産に力をそそぎ、当主みずから農作業に従事しているのである。都市生活者が田舎での生活を楽しむ山荘は、本来的に都市的要素と農村的要素を兼ねそなえているのであるが、なかでも在郷商人稲束家の山荘横丘は、都市と農村の中間的性格が特に著しいと考えられる。

2. 横 丘

横丘は、町の北東、五月山山麓、中之町より直線距離にして、7,800 mにある。この横丘は、東と西に分れ、東には墓地、西には山荘があった。山荘には、主な施設として、路地・待合を有する不蔵亭（後に未夕蔭亭と改称）と蹴鞠を楽しむ鞠場や獨足場が設けられていた。その外に稲荷社、接待堂があり、初午には稲荷社が一般に開

* 南九州大学

放された。山荘では、知人や家族の茶会、花見、蹴鞠の会が催され、また、ここは、箕面山や木部の牡丹見物に大阪から訪れる役人の饗応や休憩にも使われた。

3. 植栽時期及び樹種

植栽時期及び樹種それに入手先のわかるものは入手先を表1に示す。この表からわかるように、植栽時期は大きく二期に別けられる。宝暦十二年(1762)から寛政十三年(1801)までの前期と、文政二年(1819)より嘉永二年(1849)までの後期である。その期間は、前期四十年、後期三十年である。

前期は嘉包の時代に相当する。稲束嘉包(宝永七(1710)ー文化二(1805))、通称小兵衛、字太忠。彼は、池田が全国市場に組み込まれる過程で、日本海と瀬戸内海を結ぶ播州、但州の河川開鑿を計画し、また土地集積を押し進めて、新興酒造家として抬頭していった人物である¹¹⁾。『稲束家日記』は、宝暦八年(1758)、嘉包により書き始められた。日記に植栽の記事が現われるのは、書き始めから四年、宝暦十二年(1762)からで、二月七日の条に「小西左兵衛参候横丘木植」と簡単に記してある。嘉包の記述は全体的に簡略で、植栽記事も、樹種と、時に入手先が記されているのみであり、植栽場所、本数等はほとんどわからない。樹種は、高木では、桜・楓の他は、松・杉・檜・樺・榎・榿・櫟・榛といった林木が多い。明和二年(1765)一月の「くに木苗植る百十本」という記事からは、これら林木が植栽というより植林されたもののように考えられる。しかしながら一方では、桜・楓をはじめとして、山吹・萩・南天・紅蓮・芍薬・石菖のような観賞用の樹木や草花が植えられており、横丘が園として形を整えていく様を窺わせる。生垣用の樹木が見

うけられることにもそれは現われている。

宝暦九年(1759)及び十一年(1761)から十三年(1763)にかけてと、天明二年(1782)から三年(1783)にかけて、「土持」「縄張」「壁塗」といった普請に関する記事が散見する。しかし建物の名は記されておらず、植栽との関連もはっきりしない。

横丘に山荘ができたのは嘉包の時代だとされる¹²⁾が、確かな時期は不明である。ただ、弘化二年(1845)二月二十七日の条に、「元文五年(1740)横丘座敷山抜出水漬流」の記事がみえ、日記開始の二十年程前、すでに建物のあったことを知る。

後期は嘉光の時代に当たる。嘉光は通称小兵衛、号三化、安永二年(1773)に生まれ、安政四年(1857)、八十五歳で没した。日記を引き継いだのは文化二年(1805)である。

嘉光の植栽は文政二年(1819)に始まる。嘉光になると記述はずっと詳しくなり、植栽についても、植栽場所・方法・施肥・人夫数・費用の記入が多くなる。

樹種をみると、観賞用樹の植栽が多くなり、種類も増えていることに気付く。桜と楓はいかかわらず主要な植栽樹であるが、その他嘉光の時代に新しく加わった樹種は、常緑樹では、楊梅を筆頭に、いぶき・いちい・椿・榊・あおき・ねずみもち、落葉樹では、朴・榿・辛夷・しなの木・紫木蓮・にしき木・花にしき木・ぬるで・白芙蓉・牡丹荊・藤、それに、葉竹・紫竹・矢竹・笹といった竹・笹類である。苔植付の記事も見られる。天保五年(1834)に購入した東横丘には墓地が設けられ、松・杉・檜・榿・楊梅・桜・楓・榎・榎の類・榛・榿・辛夷・山しで・ぼけ・李・にしき木等が植えられた。

嘉光の時代、横丘は、鞠場・獨足場の設置、地続の村

表1 植栽時期及び樹種

年 号	樹 種 (入手先)	年 号	樹 種 (入手先)
宝暦 12	1762 松、楓(木部)、垣縁	文政 2	1819 楊梅、榿、桜、楓
13	1763 栂(木部)	3	1820 楊梅
14	1764 南天、紅蓮(荒木邸)、楠木(加茂)	5	1822 赤松(出在家松原)
明和 2	1765 くぬぎ、榊、からたち	7	1824 松
5	1768 榿、萩	9	1826 桜(狹谷村喜右エ門山)
6	1769 山桜(栄樹寺)	10	1827 楓(古江)、榿
7	1770 石菖	11	1828 松(龍山村)、朴(龍淵)、楓、榿、牡丹荊、葉竹、紫竹
8	1771 榿、くぬぎ、桜	12	1829 楊梅、楓、桜(狹谷村喜右エ門)
安永 1	1772 榿、茨垣	天保 1	1830 榿
3	1774 萩、芍薬	2	1831 楊梅(新南村吉田四郎五郎立林)
5	1776 杉	6	1835 榊(一摩清二郎)
7	1778 山吹	7	1836 楓(古江吉田)
8	1779 楓、桜	8	1837 楓、辛夷(大幡寺境内)、紫木蓮、花にしき木、牡丹荊、苔
天明 3	1783 榿(岸上八右エ門)	9	1838 にしき木、しなの木、榿(東山、神田)
寛政 1	1789 桃		
3	1791 榿	10	1839 杉、榿(丹州上林辻村定八)、榿
5	1793 松	12	1841 いぶき、榿、あおき、苔
13	1801 くぬぎ、孟宗竹	13	1842 榿、ねずみもち
		14	1843 榿、しなの木(丹州上林市之藤守庵助右エ門)、榿、桜、矢竹
		弘化 1	1844 杉、榿、藤、矢竹、苔、芝
		2	1845 榿、榿、苔
		3	1846 ぬるで
		4	1847 いちい
		嘉永 2	1849 白芙蓉(木部村伊兵衛)

(東 横 丘)

松、楓、矢竹
松、楓、紅楓(古江吉田)
榿、辛夷
いちい、榿、楊梅(龍山)、榿、榿、山しで
さるすべり(神田)、李、ぼけ、山しで、桜、楓
榿、楓、榿、榿、榿
榿、榿、榿
榿

山の借受、東横丘の購入をみた。そして、植栽も多くはそれら横丘の変化に伴ってなされた。

植栽の記事が始まる文政二年(1819)、鞠場が設けられる。蹴鞠は池田の富裕層に趣味として行われ、他家にも鞠場があり、たびたび蹴鞠会が催された¹³⁾。鞠場造成に前後して、桜・楓・檜・楊梅が植えられ、文政五年(1822)には鞠場上に三本の赤松が出在家より運ばれた。文政十一年(1828)二月、稲荷社前に獨足場を設けると同時に獨足場の植栽を行い、その月に檜、十月には松と桜を植えた模様である。そののちも、翌十二年(1829)に楓・楊梅・桜苗、天保元年(1830)に檜、天保二年(1831)は生垣の日除け用の楊梅と、獨足場には次々に木が植えられている。

山荘地続きの村山を請所として借り受けたのは文政八年(1825)である。日記には、その年の付録に、「三月廿五日横丘座敷之続村山請所村役人引合相済候事はより楓桜諸木植積、嘉光五十三歳又吉十四歳、但此請所文政十二年寅四月戻す」と記されている。翌九年(1826)渋谷村喜右衛門山より譲り受けた桜が請所に植えられた(文政9, 3, 17)。十年(1827)には、二月、三月、九月に桜と楓の植栽記事が認められるが、これも請所に植えられたものと思われる。

東横丘購入の翌年、天保六年(1835)頃より植栽記事は詳細となり、嘉光の精力的な植栽を窺わせる。特に、東横岡に本格的な植栽を始めた天保九年(1838)より弘化二年(1845)までの八年間、嘉光の植栽にかける意気込の強さは瞠目に値する。例えば、天保九年(1838)には、二月十三日より二十一日までの九日間に六十人の人足を使い、東横丘「入口杉戸之辺江四本竹門之上へ楡楓八本、御墓上へ楓六本楡二本山して五本女松二本榊二本御墓東土手塀裏江楓□□、藪岸江楓株三本」を植え、二十四日より二十六日までは、人足二十人で錢楡を移植し、二十七日には、李十四本、桜三本の接木を行った。また弘化元年(1844)には、二月二十三日から三月はじめに主要木施肥、三月六日は杉・檜の実蒔と藤植、

九日、東横丘黒門袖生垣檜苗植

十日、稲荷社後櫓下へ三尺斗杉苗一本植

廿三日、東丘杉戸下引分並楓イカミヲ直し長杉立替

廿四日、味淋^{トマツ}土ヲリ二本小方疲杉入候

廿五日、四月上旬迄並楓立添長杉六七寸竹貫ヲ結ひ四月になると、五日に施肥、七日と九日は杉二本移植、十一・十二日、いちい四本、檜六本移植、十三日には杉の移植場所に芝張り、と、二ヶ月近くを横丘の植栽と樹木の管理に費している。

嘉光は樹木の成長にも興味を示し、たびたび測定を行っているが、天保十四年(1843)付録に記された横丘の太木とその幹周りの表により、松の太木の多さを知ること

とができる。東横丘が「六七尺の小松林」であった(天保14, 付録)ことを考えると、あるいは、これら松の太木も横丘に自生していたのかもしれない。

横丘に楓と桜が多かったことは表1からも知れる。楓は山楓の他、一行寺楓、青柳楓、紅楓、小雪楓の名が記されている。桜は、山桜、渋谷桜、芝山桜、四王桜、垂桜、落穂桜、遅桜、早山桜、梅花桜の名がみえる。

弘化三年(1846)以降、横丘の植栽に関する記述は次第に簡略となり、嘉永四年(1851)二月十六日には「予不適生涯之木植終」の記事が認められる。

嘉光の子、嘉休、号復古の代になると、日記の記述そのものが簡略化する。と同時に、横丘の山荘生活に関する記事が減り、内容も、収穫、用木伐、垣修理等に限られてくる。したがって横丘山荘の盛時は、文政の初期より弘化の頃まで、およそ三十年と考えられる。

4. 樹木の入手

樹木の入手は、植木屋からの購入、知人よりの譲受、自家生産によっている。表1の入手先には、木部・古江・吉田・東山といった細郷谷の諸村や、猪名川下流の加茂・神田の名がみえる。池田周辺の村々では広く植木の栽培が行われ、特に細郷谷は元禄の大阪に知られ、寛政年間以降は大阪以外の諸国にも販路を広げた植木の産地である。日記の記録以外にも、それら植木産地からの購入は多かったと思われる。また、産地に近接していることが、嘉光らの植栽に対する関心を高める一助となっただろうことも想像できる。

近在の植木屋以外にも、隣村の渋谷をはじめとして、滝山、出在家、新稲、猪淵、一庫の村々や丹波からも樹木を集めている。丹波からは橡としなの木を手に入れており、これは丹波の出稼人の手になると思われる。

渋谷・滝山・出在家・新稲より譲り受けたのはいずれも山採りの太木で、移植には人手と手間を要した。文政五年(1822)、出在家松原より赤松を三本移植した時は、一日目に嘉光を含め十六人で掘取と横丘東ノ谷までの運搬を行い、翌日十二人がかりで植え込んでいる。天保二年(1831)の楊梅は「太サ一尺五寸斗長サ三間」、前もって根廻しを行い、移植には人足十人が必要であった。渋谷の桜も、三年以前に根廻しを行い、移植の準備をしている。(文政6, 4, 8)

それら太木以外にも、「保宇の木植ル、但猪淵もらひ来」(文政11, 2, 29)、渋谷喜右衛門にて桜彦林へ三本もらひ獨足場之上江一本受所流の上二本値る」「文政12, 2, 29)、「御墓上江鉛屋敷中にて貴候楊梅苗高八尺斗大葉楊梅植」(天保9, 3, 10)と、日記中には、折にふれ知人より樹木を譲り受けていたことを窺わせる記事が散見する。時には、所望されて樹木を譲る場合もあった。「福島島森米平別家米屋太兵衛別荘島森偶居風外禪師ヲ復古

江所望ニ付一行寺三本山楓三本山楓苗ニ都合八本為持遣候兵三直八、於東横丘堀荷拵」（天保13、2、9）、「夜薩州大坂蔵屋敷御留主居頼佐一郎殿箕面山観楓、夫々当地へ来木綿屋茂兵衛宿復吉罷出候、尤呼ニ来候故也、花菖蒲ともいせ菖蒲共大輪珍花望之よし」（天保13、10、13）、「昨日一くら惣介奥谷下口々南ニ在之女松之立木所望」（天保14、10、30）。これら所望の消息を伝える記事は、一方では大阪の商人や蔵役人に、他方では近在の農民につながる稲束家の交友関係を如実に示している。

自家生産、つまり、実蒔、ひこばえや自生苗の育苗、接木の記事は、文政十一年（1828）頃よりひんぱんに現われるようになる。実蒔については、「不うの実蒔」（文政11、2、29）、「檜苗実蒔々三年目植」（天保9、3、12）、「檜実蒔」（天保12、2、14）、「泉水之堤実蒔一行寺の下に山桃苗はへ候得とも」（天保12、付録）、「杉檜実蒔石屋垣内作兵衛差図」（弘化元、3、6）、といった具合である。この弘化元年（1844）の実蒔では、本文に蒔床の作り方、実蒔法の詳しい記述があるばかりでなく、付録に山本村の実蒔法が記してあり、栽培技術に対する関心の高さを窺わせる。

自生苗の育苗にも力を入れている。たとえば、太さ八九寸、高さ五間余の楓は、「藪中ニ自然はへたる楓苗を竹を伐肥を入六七年も世話を尽候ニ付漸々其功今年顕候」（天保12、4、14）木であった。

接穂も熱心に求められた。天保九年（1838）、三月六日、「仙吉神田へ遣法伝寺前在家にて赤椿穂貫治兵衛東山へ遣向玉椿寄接木一本持帰ル、屋から横丘まりはのうへ椿接」、九日には「小兵衛山治兵衛を連給椿を見ニ行、……天□寺上伊右衛門へ唐椿見ニ行」と、嘉光みずから接穂を求めて出かけ、翌十日、「鉛屋山ニ在之候椿へ東山ニテ椿台三本二百文、山治兵衛調来寄接いたし候」。

技術力の要求される接木は専門家にまかせられることが多く、費用もかかった。以下の諸記事がそれを物語る。「横岡請所桜つぎ瀧山惣兵衛」（文政12、2、12）、「横岡楊梅九本切接、佐保之大岩仁右衛門接候謝礼ニ朱遣候」（天保6、4、6）、「流東岸之遅桜へ落穂桜高継百十文、池之上松林中二本代六十四文……東野村高儀へ渡」（天保9、2、27）。

5. 管理及び費用

横丘の木々には、時折、枝伐・たわめ・引付・ませ入等が行われた。だが、手入の最たるものは施肥であった。天保十三年（1842）年の施肥状況を表2に示す。廐肥・油糟・小便・下肥の他、池土やきため土、酒袋洗汁のような塵芥が肥料として利用されている。移植時、移植もない木、苗木、それに楓への施肥が目立つ。施肥の時期は、主として二月、三月、四月である。

近在の村からの移植や接木に多くの費用を要したことはすでにみたが、施肥や日常の管理にも少なからぬ額を費している。天保十四年（1843）二月二十六日には、掃溜土、廐肥、ごもくの運搬料を人足五人に二百文づつ、一荷当りでは二十四、五文支払った。また、馬糞一荷代一匁の記述もみえる（弘化2、3、6）。

以下、費用の記入のあるものを列挙すると、まず、「一行寺楓樹鞠用ニ障候故丸太杉を立枝を上ル……しゅうろ縄代杉代とも日傭凡十五匁」（天保8、4、20）、天

表2 施肥（天保13年）

年月日	施 肥 内 容	備 考
天保 13 (1842)		
1月 7日	新荷社生垣標苗：廐肥 杉 苗：廐肥	去年植
2月	独足場松、桜、楓：酒袋洗汁二荷 駒場 松 二 本：酒袋洗汁一荷 新荷社後杉二本：酒袋洗汁一荷	
2月22日	楓：水小便	
2月27日	独足場へ廐肥：肥 土	
2月30日	新荷社楓四本	
	新荷社大松 油 糟 山 桜 林 池南山楓四本：油糟小一升 駒 場 松：廐肥、下肥、油糟	
3月 1日	大杉原楓三本：油 糟	先日植
3月 7日	楓 苗：肥土、廐肥、廐肥	
3月	待合上楓四本：廐肥、油糟	
4月20日頃	新荷社後立木：たる肥一荷 新 荷 社 松：たる肥半荷 池 北 野 田 楓：たる肥半荷 池 南 楓：たる肥半荷 井 戸 下 小 杉：たる肥一荷 垣 根 楓 三 本：たる肥一荷	
4月27日	東 横 丘 楓 苗：肥、三本に一荷	今春植
4月28日	紫 納 屋 楓：廐肥二荷 東 横 丘 松 苗：廐肥一荷、廐肥	当日植
4月29日	東 横 丘 楓 苗：廐肥五荷	
6月 7日	栗 肥	
6月 9日	井 戸 下 小 杉：小便一荷	
7月17日	新 植 木：至薄小便 東 横 丘 松 苗：薄小便	

保十三年（1842）六月、「五日々十二日八日横丘行与八并日用ノ廿一人半……凡七十匁斗六ヶ敷もの」、鞠場へ藤植え、石屋垣内作兵衛へ代三匁（弘化元、3、6）、楓いかみ直し長杉結添「ノ四人長杉代貫竹縄橋柁縄代日用賃飯代凡四十匁大造成事」（弘化元、4、13）、弘化元年（1844）四月に移植した杉は、「土留石垣味噌岩堀運植手間等二本ニ而槩一両も費、恐入候」と記されている。

「六ヶ敷もの」、「大造成事」、「恐入候」と記されたことばが、嘉光にとって、横丘の管理費用が無視できない額であったことを示している。ちなみに、天保改革で規定された賃金は、大工作料三匁二分、農方日雇賃男百六十文、女八十文である（天保13、5、16）。

以上のことから、横丘山荘の維持に多くの費用がかかり、当時の稲束家がその経済力を有していたことがわかる。さらに、移植、施肥、その他の作業に、多くの場合嘉光自身がたずさわり、その結果にも多大の関心をよせていることにも注目させられる。嘉光の山荘経営に対する熱意が横丘山荘を維持していたともいえるのである。それを裏付けるように、嘉永四年（1851）夏以降、日記にみるかぎり横丘の管理がまったくなされなかった二年の間に、山荘と墓地の杉・檜はすべて枯れてしまう。嘉永六年（1853）九月二十日の記事は、それを、「未夕蔭境内東丘藪御改葬植候杉檜楓不残枯……多分立枯遠目ニ赤ク望与吉左衛門申候、扱々世話不行届也しかし作方無寸暇残念之事」と記している。東横丘購入より十年以上

に及ぶ手入の結果がわずか二年で水泡に帰したことは、管理者不在の山荘の荒廃のはやさを物語っているといえよう。

6. 美景の企

多くの時間と金額を費して横丘に樹木を植えた理由を嘉光はしばしば日記に書き記している。それによると、嘉光の植栽はある美意識のもとになされていたことがわかる。それはまず、寒林、つまり冬木立の美に対する好みである。天保九年（1838）の付録には、二月十四、十五の両日東横丘に榆を植えた記事に続けて、「御墓之上後年□森々として寒林を愛事榆楓最美也、因之松を伐寒林のよ敷樹を撰植置候」と、記している。この二月の植栽は既述のように、六十人の人足で榆、楓、楓等二十本近くを植えたのであるが、同付録はそれをまた、「後世寒林為観美景」としているのである。

木立の美しさは嘉光の心をとらえたらしく、天保十三年（1842）四月には、「園中杉苗東横丘御墓垣へ喬木森々思美景植候」とある。嘉光はその前々年、天保十一年（1840）に東横丘高山道右檜原の土手際に、「風景或は後年之用木を考」、楓並木を植えている（天保11、付録）。「巾二間余杉開戸迄四十間斗深三尺堀榦株を抜き地和ケ楓苗長サ二間々四間位廿本」を植え、その間には楓と桜とを植えた。こう記した天保十三年（1842）の付録にも、「盛木並楓可得風景」のことがみえる。東横丘は墓地であるから、山荘の庭と同列に論じることはいえないが、ここには、樹林を風景の美的要素としてとらえ、風景を自身の手で作らんとする意識が認められる。

山荘では、楓と桜が最も好まれた。弘化元年（1844）付録には、鞠場への杉移植を記して、「全二本大杉一本檜美景企候、山の位は杉檜楓美敷は山楓、桜は一花楽短候」と述べられている。「楓は発葉落葉迄愛保し観植にては楓者第一也」（天保13、付録）ともある。同じように「美景」の企であっても、山荘の植栽に求められるのは、楓の変化に富んだ優雅な美しさであり、寒林の森々とした美とはおのずから異っていた。

新緑の楓は特に好まれた。弘化二年（1845）一月、鞠場に移した山楓について、「三本無難ニ着生立候は、新樹風景後年美景如見」と記し、また、「新樹之節獨足可試事」とも記している。

「桜は一花楽短候」と記し、「桜より山楓愛長し」（天保12、付録）と、花期の短さで楓に劣るとされる桜であるが、多くの種類の桜が植えられていたことにも、桜に対する好みの強さは現われている。桜は花を賞するために植えられ、花の時期にはしばしば花見が催された。天保十年（1839）三月十日の条には、前年高接した落穂桜の施肥を記した後に、「後年ニ落穂桜美観ニ相成候様斗候、観花人可憐」と、花の時期の美しさを想像している。花見が桜の植栽を促すこともあった。天保十三年（1842）付録に

は、「観桜ヲ植桜之起企」と、桜の植栽計画が記してある。

このように見てくると、花、新緑、紅葉、寒林と、季節の変化を端的に現わす樹木が好まれていることに気付く。樹木の美は季節と結びついて賞されるといえる。それは、樹木に表象された自然の循環、生命の営みが美としてとらえられ、観賞の対象となっていることを示している。さらに、「新樹之節獨足可試事」のことばには、自然の美を、遊びのなかで、体全体を使って楽しもうとする意識が認められる。

7. 樹木の利用

天保十一年（1840）、楓の並木を、「風景或は後年之用木を考」植えたこと、嘉光は記していた。嘉包の植えた杉や檜を回廊用材として伐り出した（天保11、6、2）ことからわかるように、横丘は、稲東家の山でもあった。「横丘木伐」の記述はしばしばみられ、時には具体的な利用が記されている。たとえば、杉谷借家の用木に松二十五本（文政12、1、4）、あるいは、杉谷酒場井戸桐木用松四本（天保9、10、22・28）、また米屋町四畳半三枚障子の腰板に接待東裏の桐（天保9、11、25）。

横丘の柴や落葉も相当な量になった。天保十三年（1842）九月、柴納屋の柴覚は、古柴八十束新柴五十束を記している。また同年七月には「松落葉廿〆荷」の記事がみえる。嘉永四年（1851）一月三十日には、「落葉横丘昨日今日東丘〆十四束柴納屋二階上ケ都合三十束余も拵置候」とあり、柴納屋に柴や落葉が常に貯えられていたことを知る。横丘は薪炭林としても機能していた。

さらに、横丘の竹藪は竹材を供給し、竹の子を産した。「裏小屋洲やのうたけ……三十本斗切」（天保元、9、23）、「高塀壁下地竹伐」（天保5、10、4）、「回廊壁下地用横丘早竹伐取」（天保11、7、19）、「破竹伐塩置場用」（天保11、9、27）、「家根蔀小笹〆百五十二束荳」（天保14、10、29）、「はちく藪六寸七八寸迄竹六十本伐、……かて地造」（嘉永3、1、14）と、日記は竹材の様々な利用を記している。竹の子も多くとれ、天保十二年（1841）の付録には、「四月九日小満之七日目横丘藪の竹のこ全盛稲荷下藪凡取大小ニて四百本程見る」とある。

横丘には梅林があり、その実は池田や天満の市で売られた。天保六年（1835）には「横岡輪旨梅小三升十八はい代六百〆」、弘化元年（1844）には東横丘の豊後梅が「数二百八十代八百六十文」と記されている。東横丘には李が植えられ、みかん取り（弘化4、10、15）の記事もある。「銀杏捨取凡小二升」（嘉永元、9、3）と、銀杏も利用された。

8. 開花の記録

横岡の桜の開花は毎年記録された。本文に記されるばかりでなく、巻末の付録にまとめられ、前年と比較された。以下に天保十三年（1842）付録を例にあげる。

○彼岸終日横丘入口塚彼岸桜は^{（マア）}花盛也、愚覚ニ

例年彼岸終此十日も過キ開花之様ニ覚候、愚以為去寒入日ハ寒氣緩ク入寒ハ二月十三日凡八十日寒弱候故開花十日も早哉此吉凶如何、

- 二月廿二日横丘塚前石鳥居際園垣水木隣山桜一步通開花初候、立春ハ六十二日目、
- 二月廿五日横丘塚石鳥居際園生垣水木之隣山桜全盛、立春ハ六十日目也、昨丑与ハ十二日早吉凶如何、
- 待合上芝山桜三月二日全盛六十七日目、昨辛丑トハ九日早シ
- 落穂桜開、立春ハ七十二日目全盛三月七日也、
- 落穂桜花終ニ遅山桜開三月十三四日八十八夜十日前、鞠場上式木園遅桜稲荷社上松林中遅桜少々宛遅速在之候得とも当春遅速少シ如何、

ここでは、横丘の処々にある桜一つ一つの開花時期に細かく注意が払われ、その遅速が年の豊凶を占う手段にされている。同付録には、「立夏八日杜鵑初聞於未夕蔭亭」、「横丘接待裏白椿立夏之比残華在之例年ハ遅様覚候」とあり、本文三月五日の条には、「横丘松林入梅蟬初声」とあって、桜だけでなく、横丘全体の自然に目が向けられていたことを窺わせる。「登鮎至而無數、稲作克」（文政12、付録）、「千載松ニ松虫初鳴」（天保2、7、16）、「杜鵑鳴於皐月山数声徘徊」（天保5、5、30）の記事もみえ、横丘に限らず、池田周辺の自然が稲作との関連で観察の対象となったことがわかる。

日記には、田植、稲刈、水論、雨乞と、稲作に関する記述がたびたび現われる。実際、稲作にたずさわる稲東家にとって豊凶は重大な関心事であった。が、それ以上に、酒造家として、酒造米の価格と量を左右する豊凶が関心の的であったにちがいない。稲作の指標として意味を付与された自然に、農民的関心と商人的関心とがよせられたとみることができよう。

もちろん、横丘の桜は開花時期を知るために植えられたのではない。すでにみたように、花の美しさを楽しむために植えられたのである。嘉光ら上層町人は、自然を美として愛でる教養も、時間的経済的余裕も有していた。だが、都市の消費生活者と農業生産者との性格を兼ねそなえた在郷商人である稲東家の人々にとって、山荘の桜に代表される自然は、審美的賞翫物であるばかりでなく、農業的観察の対象でもあったのである。ここで、用木や薪炭それに果実が横丘から得られていたことを思いおこすならば、横丘の自然は、稲東家の自給的生活をささ

る諸々の物資の供給源でもあったことがわかる。

むすび

横丘山荘を植栽の面からみると、山荘の植栽に多くの労力と経費がつき込まれていることがわかる。それは、「美景の企」、いいかえるならば、茶の湯、蹴鞠、花見等遊びの舞台をしつらえるための企である。そのような意味で横丘は、富裕な商人が、自然を都市的に享受する場であったといえる。

しかしながら一方では、開花、ほととぎすの初音、虫の声といった審美的文学的賞翫物が、天候の指標として農業的観察の対象となり、横丘の樹木は、用材や燃料を供給して稲東家の自給的生活をささえている。竹の子や果実の利用もみられる。横丘には、生みだす自然、生産に直接かわる自然の姿も認められるのである。

都市と農村との中間的性格は、横丘山荘の植栽を含めた自然に、消費と生産、遊びと労働の両義の意味を与えているとみることができる。しかも、そこでの自然は、人間の管理のもとで維持されうる、いうならば、人工的性格の強いものであったことが、そこにつきこまれた多大な労力と費用、また、管理者不在の山荘の荒廃の速さに示されているといえよう。

註

- 1) 稲東家日記：池田市史史料編4及5、池田市、1973、以下断りのない限り、横丘に関する記述は同書による。
- 2) 池田市史概説篇（1955）、池田市、92-95参照
- 3) 同上、167-168参照
- 4) 乾広巳（1982）：畿内在郷町の町構造：日本の都市と町、雄山閣、189参照
- 5) 同上、177参照
- 6) 註1、史料編4 解題参照
- 7) 註2、94参照
- 8) 註2、119-120参照
- 9) 原田伴彦（1957）：日本封建都市研究、東京大学出版会、354-355、477-499参照
- 10) 註2、94参照
- 11) 註2、118参照
- 12) 伊居太神社日記：池田市史史料編3、池田市（1968）、1593参照
- 13) 池田市史概説篇（1971）、池田市、264参照

Summary : Garden trees in a wealthy farmer-merchant retreat in the Edo period were surveyed by means of their family diary. The species of trees, the planting period, the maintenance, the means of tree acquisition, the planting plan, and the utilities have been shown in this paper. And we concluded that the family enjoyed the beauty of the garden plants, utilized the trees for building materials and fuel, sold the fruits, and observed the flowering time to find out the weather which determined the rice crop.